

海軍の新たな時代

グリナート米海軍作戦部長

アモス米海兵隊総司令官

(訳者： 平山 茂敏)

Admiral Jonathan W. Greenert, U.S. Navy and General James F. Amos, U.S. Marine Corps, "A New Naval Era," *Proceedings*, Vol. 139/6/1, 324, June 2013.

翻訳の趣旨(訳者)

本論文は、*Proceedings*の最新号(翻訳当時)に米海軍作戦部長と米海兵隊総司令官の連名で発表された”A New Naval Era”の翻訳である。この小論の中で両者は、米国の安全保障は内に財政問題、外に新たな安全保障環境といった課題を抱えているが、これは挑戦であると同時に歴史的に見れば今こそが改革のための好機であると喝破している。また、改革のために必要なものは、艦艇や小銃といったハードの更新ではなく、思考法の転換、仕事のやり方といったソフトの面であるとの認識が示されており、そして将来の米海軍・海兵隊が具備すべき機能として、編成の柔軟性を一層増した水陸両用能力が必要であり、そのために海軍と海兵隊が今以上に一体となって連携・協力していく必要性があると謳っている。今後の米海軍及び海兵隊の改革の方向性を理解する1つの指針となる論文であり、一読の価値があると思う。

今日、我々は並外れた軍事的な挑戦と好機の数々に直面している。本国では財政問題再建による経済的制約に向き合っている。海外では中東及び北アフリカにおける政情不安が継続しており、イランは核兵器開発を追及し、東シナ海と南シナ海では領土紛争が尾を引いている。十二年以上に及んだ戦争が終わりを告げている今、継続中のアフガニスタンからの兵力削減は我々の部隊をリセットし、新たな脅威に我々が集中するための好機を提供している。我々はこのリセットと集中の組み合わせを、我々の海軍と海兵隊が一丸となっていかに訓練し、作戦し、戦うかを見直す上で利用しようとしている。

我々は以前にもこれを経験している。実際、我々の歴史を通して、我々はこれを繰り返し経験してきた。二つの世界大戦の戦間期に、戦艦の隻数を制限する国際条約と、航空技術の発達航空母艦の発達をもたらした。太平洋戦域の長大な距離を越えて戦力を投射する能力が創り出された。その同じ時代が、海洋における機動についての新しいアイデアを刺激し、両用戦能力の発展へと導いた。朝鮮戦争では、(活動領域を)陸上に限定された相手を繰り返し側面包囲するための機動空間として海洋を使用できる兵力が持つ非対称な優位を実証した。後の冷戦期は、ソビエト海軍によりもたらされた外洋における脅威に対抗することに焦点を当てた海洋戦略概念とそのための制海能力を生み出した。そして冷戦後、我々の作戦上の焦点は、「海から(From the Sea)」及びその再演である「海から、そして前へ(Forward...From the Sea)」といった海洋戦略で示された様に、陸上の出来事に影響力を行使しうる遠征能力へとシフトした。海軍と海兵隊で共有されてきた海軍の伝統とは、我々が遭遇する時代の流れに逆らうのではなく、それがもたらす好機に乗じるというものである。

我々は軍が、未だ定まらぬ変化の時代にあることを理解している。しかしながら、我々の先人同様、我々はこの状況を、将来の海軍力の妥当性と予算的適合性を維持するためにこれを形作る一つの好機と捉えている。我々はこれを遂行する我々自身の能力について楽観的である。なぜなら、海軍作戦部長及び海兵隊総司令官としての我々のビジョンはすでに密接に連携しているからである。我々は将来の海軍力は共に考え、共に計画し、共に訓練し、そして様々な艦艇に共に展開するものになると見ている。我々の軍は水上、水中、航空、遠征、サイバーそして宇宙能力が組み合わされたものであり、我々はこれを様々な不慮の事態に対応しうる柔軟な組み合わせで展開することになる。

今日と同様に、我々の将来の海軍力は、強固な前方プレゼンスと適切な即応性を維持することにより、それが求められた場所に、求められた時にそこに展開する。我々の外交上の国益が脅威に晒され、我々の市民が危険に晒された時、この統合海軍部隊は我々が介入するための能力を提供するであろう。この部隊は作戦指揮官のためには選択肢を創り出し、国家指導者のためには時間を稼ぐ。この海軍部隊は平和を維持し、パートナーの能力を構築し、人道支援を提供し、信頼できる戦闘力の抑止効果を通じて戦争を防止する上で必須のものとなる。紛争がエスカレーションした時には、海軍部隊は海洋からのアクセスを確保し、戦い、そして勝利するための必要なツールとなる。

米国防省は将来の経済及び安全保障環境に基づいて、戦略、資源配分、目標

の見直しに着手している。我々も同様に、海軍力として如何に戦うかについて改めて考えている。対立する意思のぶつかり合いという戦闘の本質に変化は無いであろうが、その特徴の進化発展は止むところが無い。我々の敵は狡猾であると同時に創造的であると予測しており、彼らは我々の弱点を突き、我々の強点を制限するためにあらゆる手段を講じてくるであろう。我々は伝統的な作戦領域の境界を越えて戦うことができる海軍の非対称能力を発展・運用しつつ、あらゆる手練手管に通曉し、策略に富まなければならない。来るべき時代においては、敵を戦いで打ち負かすのと同様に、敵を出し抜くことも必要になる。

海洋時代の安全保障上の課題

我々は海洋国家である。我々とパートナー諸国並びに同盟国の繁栄は、通商、金融、情報及び安全保障のグローバルなシステムに支えられており、これらは「公共財(Commons)」、すなわち海洋、空中、宇宙及びサイバーにおける統治されていない空間への自由なアクセスに依存している。我々の国防戦略指針”Sustaining U.S. Global Leadership: Priorities for 21 Century Defense”は公共財の重要性を強調すると共に、海軍と海兵隊が将来において如何に作戦し戦うかについての再評価のための我々の努力を周知している。

大量の商品や日用品を効率よく運ぶ能力は、シーレーンを最も重用し、かつ、経済的な交易路としている。サイバー空間、物理的な形態としての海底光ファイバーケーブルは、金融決済及び情報を通じて、通商においてさらに重要な価値を持っている。これらのルートは戦略的な海洋交差路(maritime crossroads)、例えばホルムズ海峡やマラッカ海峡、或いはスエズ運河で収束している。これらの水域、乃至はこれらを取り囲む沿岸地域における政治的な不安定や地域紛争は、我々の市民、同盟国、国益への脅威となる。

海洋の交差路と沿岸地域は、更なる経済的、政治的、文化活動の場となっており、そこでは国家、地域社会、思想が交差し、それにより度重なる摩擦と衝突が生起している。世界経済と安全保障への重要性から、交差路におけるたとえ小規模の混乱もグローバルな影響を及ぼし得る。例を挙げれば、アラブの春や現在進行中のシリア情勢は部分的には、地中海、紅海、ペルシャ湾一帯の海洋交差路における思想的及び経済的トレンドを惹起しており、これらの事件による不安定化は全世界的な政治及び経済システムに波紋を生じさせている。沿岸海域にある我々の外交関係施設は、勝利がしばしばメディアへの露出で計ら

れる環境にあつては、極めて目立つ目標である。海賊、密輸業者、テロリストは船舶運航の集中やその他の海洋交易路や沿岸交通を利用し、獲物から盗み、ハイジャックし、これに圧力を加えている。

海洋交易路及び近傍の米同盟国は、パワーバランスの変更を狙った域内アクターによる軍事的及び経済的混乱に脆弱である。長距離精密誘導兵器及び海洋拒否能力を含む先進的な通常兵器の開発と拡散は、米国と同盟国が共通の国益を防衛するために兵力を投射する能力に挑戦することを狙いとしている。我々はこれの具現を許さない。これらの挑戦への対応は、我々の兵力整備計画と戦略に反映されなければならない。

団体スポーツ

歴史的に、海軍は二つの目的のために存在してきた：一つは制海すること、もう一つは制海を用いて陸上に力を投射することである。これらの二つの目的は今日も有効である。この活動は団体スポーツであり、海軍と海兵隊はオールスター選手の集まりである。新たな時代における財政及び安全保障上の課題は、我々が一つのチームとして作戦し、戦うという仕事をより上手く行うことを求めている。

未来の海軍部隊についての共通のビジョンを達成するために、海軍力を運用する手段(ways)及び手法(means)についての分析と新しい発想が求められている。今やかつて無いほど、海軍・海兵隊チームはその能力を効果的なものとするためにより良く統合されることが求められている。単一軍種（海軍または海兵隊だけの）戦闘の原則は、ある戦役における全ての活動が単一の目標に繋がっていると述べていた。しかし、将来の海軍の指導者たちは、沿岸地域の出来事に対し、独立したスペシャリストとしてこれに対応するのではなく、それにかわって、敵に一連のジレンマを突きつけるために、海軍のパワープロジェクションが持つ全ての手段を尽くす。

新たな安全保障環境における一連の挑戦は変化し続けていることから、海軍チームは円滑に統合され、新たな情勢に容易に適合できる必要がある。我々はアドホックで、拡大縮小ができず、より柔軟な構造で行われる広域に分散した作戦を支援できない固定的な指揮組織を置換しなければならない。我々は海軍・海兵隊のために統合化された作戦概念を開発し、これをより互換性のある機材と共に配布し、そして、両軍を革新的な部隊パッケージで展開する必要がある。

海軍部隊の構成に対する現行の「万能型(one-size-fits-all)」志向は、我々が直面する可能性が最も高い安全保障上の課題を対象に再評価されなければならない。創造性と独自の発想が推奨される必要がある。

我々は、一つの海軍チームとして戦う我々の能力に影響を及ぼす溝を取り除く必要がある。我々はより柔軟な指揮組織を海軍と海兵隊の間の日頃の関係を通して完全なものとする。この関係により、海軍グループや任務部隊がより迅速に適合し、全ての能力を思うがままに行使できるようになる。海兵隊の計画立案者は艦隊の作戦と主力艦艇の即応性を維持する上での課題を理解し、その結果、我々の遠征任務の準備と実施がどのような影響を受けるかを理解しなければならない。海軍の幕僚、特に我々の両用戦能力を運用する幕僚は、様々な軍事作戦を通じての海兵隊の能力の運用について理解し、実践しなければならない。我々から見ると、今日の海軍部隊はその基準に達していない。

変化する環境を利用する

幸いなことに、我々の軍が直面する最も差し迫った課題は、大掛かりな（防衛）計画上の修正というよりも、知的な努力と文化的変化を必要とするものである。我々のイニシアチブは、海軍・海兵隊のさらに効果的な統一を支援するためにいくばくかの投資を必要とするだろうが、そのためのコストは予想される予算の範囲内に容易に納まるだろう。我々が置かれている状況は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期に極めて似通っている。当時、米海軍は、新たな能力を開発し、空軍力と潜水艦を運用する様な新たなコンセプトを実験する艦隊の努力を、海軍将官会議(General Board)が主導した。今日、海兵隊と海軍の前任指揮官たちによる海軍委員会(Naval Board)が全く同じ目的のために、定期的に会合を開催している。この委員会は、海軍と海兵隊における共同の戦闘能力の発展を達成するための知的努力を監督している。

我々の海軍の戦闘能力の改革と改善のための要処置事項を見つけ出すために、遠くまで足を延ばす必要は無い。ここに、海軍委員会及び軍内の改革者達が考察するであろう事項のうち、優先順位の高いもののいくつかを示す：

- 海軍力の中核能力と、これと直接関係する地域司令官達とのより良い連携を目的として、我々の軍のデザイン及び展開モデルを、前方プレゼンス、抑止及び危機対応といったレンズを通して評価せよ。我々は強襲上陸

艦艇以外の船、例えば洋上前方展開基地(AFSB: Afloat Forward Staging Bases)、駆逐艦、沿海域戦闘艦(LCS: Littoral Combat Ships)、機動上陸プラットフォーム(MLP: Mobile Landing Platform)、統合高速輸送船(JHSV: Joint High-Speed Vessel)に乗艦した海兵隊分遣隊の評価と実験を行う。我々は同様に、陸上に駐屯した海兵隊分遣隊、小型舟艇及び河川作戦の統合と、統合化された河川作戦の海軍作戦への一体化を探求することになる。

- 海軍部隊内における努力の統一を達成するため、海兵隊と海軍の戦域コンポーネント指揮官の幕僚間のより良い連携を創出せよ。この努力の一環として、我々は海軍部隊の展開を目的とした、より即応性の高いメカニズムを生み出すための、海軍作戦センターにおける海軍・海兵隊の幕僚間の協同も評価する。両軍の協同の努力が、海軍と海兵隊で最近承認された海洋安全保障協力政策(Maritime Security Cooperation Policy)に記された様に、海洋戦役計画の立案のために必要である。この計画によれば、海軍コンポーネント指揮官は日々の戦域作戦及び危機対応上の必要性を、個々の部隊毎ではなく統一された海軍部隊パッケージの形式で明示することになる。
- 大規模作戦のために集結できる一方で、広範に分散したプレゼンスの必要性にも対応できるように、我々の遠征軍の能力を向上させよ。強襲上陸即応部隊(ARG: Amphibious-ready-group)が分割される様な作戦が今日では常態化している一方で、これらの作戦を支援する兵站や指揮統制のシステム並びにプロセスの現状はその場しのぎのものである。我々の強襲上陸艦艇は、独立した作戦のための適切な通信機材と自己防衛システムを装備しておらず、海兵隊遠征ユニット/ARGのチームは等しい機能を持つより小さな組織を創り出すために分割することができない。我々の海軍の指揮統制組織は適切にデザインされていないか、独立作戦から大規模の不測事態に至る各種事態に柔軟に対応できない。特に、空母といった伝統的な「海軍」部隊に、強襲揚陸艦といった伝統的な「海上」部隊が加わり、これに海兵航空地上任務部隊(MAGTF: Marine air-ground task forces)が加わった場合はその典型である。我々は適切な機材、独立作戦を支えるために適切な強襲上陸艦艇への適切な乗船区分を明らかにする。様々なパワープロジェクションのオプションのための効果的な手段を見つけるために、我々は空母打撃グループの複合戦指揮官と MAGTF の指揮統制組

織の構成を検討する。

- 我々の伝統的な強襲上陸艦隊の規模の面での不足に対応すると共に、我々がいかに人員物資を組織し、搭載し、揚陸するかについて更なる柔軟性をもたらす様な大規模な海兵隊による遠征危機対応作戦への新たな取り組みを発展させよ。海軍・海兵隊チームは、柔軟に編成できるような遠征分遣隊を支援するコンセプトを持ち、訓練を実施しなければならない。我々は新たなプラットフォーム、例えば沿海域戦闘艦(LCS)、洋上前方展開基地(AFSB)、機動洋上プラットフォーム(MLP)、統合高速輸送船(JHSV)、そして大型の中速ロールオン・ロールオフ(RORO)船をこれらの作戦のための我々のコンセプトに組み入れる。これは、我々の指揮統制要領、我々の組織、そして我々がこれらの新しいプラットフォームをいかに装備するかと密接な係わり合いを有している。
- 更に効果的なイノベーションと海軍部隊における実験を支援するために、我々のコンセプト開発と教育訓練のための組織のいくつかの部門を統合せよ。海軍各種戦グループ(Naval Warfare Group)と海兵隊のエリス・グループ(Ellis Group)との間の既存の連携の上に、我々は作戦部隊、艦隊訓練グループ、コンセプト立案者及び各種戦開発センター(warfare-development center)の間の連結を作り出す。海軍と海兵隊の間の持続的で目に見える相互作用が、これまでの気まぐれな関係を塗り替えていく。この接続は革新的な図上演習、実験及び演習を志向した組織的活動により、強化されていく。戦闘力の開発のための相互作用は、様々な組織の専門家の中で今後益々盛んとなり、イノベーションのための更なる触媒として機能することとなる。
- 我々自身の艦隊及びパートナーの艦隊を、主要演習シリーズ、すなわちリムパック、ボード・アリゲーター、ドーン・ブリッツを通じて造り上げよ。例えば、次のドーン・ブリッツには日本の自衛隊の部隊が参加する。我々はこれらのイベントを、上記のコンセプトの開発及び実験と共に導いていく。それぞれの演習は明確に定義され、設定において革新的であり、米国及び国際的な能力の統合の改善に焦点を当てた目標を持つことになる。

将来の海軍作戦のための我々のビジョンの定義と達成は、コンセプトを開発し、実験し、作戦面での経験を積み重ねるというプロセスを反復することにな

るだろう。海で航跡を追う様に、我々は潮流といった我々を予定コースから逸らす外力の影響を受けることとなる。我々は、新たな機会を歓迎し、向かい潮にも関わらず解決策を探求するような、制度的、個人的な弾力性を獲得しなければならない。

歴史は、我々の海軍力が勝利のために作戦及び技術の両面で新生面を開拓してきた数多の事例を示している。米国は新たな戦略と新たなレベルの防衛力整備に軍を適合させることになる。このため、海軍と海兵隊のチームは前方プレゼンス、危機対応、地域的抑止、グローバルな海洋公共財の集団的な安全確保の基盤構築で、更に大きな役割を演じることになるだろう。幅広い不測事態に迅速に対応する我々の能力は、我々を統合軍における不可欠の要素としている。海軍と海兵隊の最高指揮官として、我々は来るべき財政及び安全保障環境に適応するために必要な変化に専心励むことを誓う。共に手を携えて、海軍と海兵隊は前方に展開し、危機に即応し、平和の維持に貢献し続ける。